博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査）　吉冨朝子　印

学位申請者　加藤　慧　（かとう　さとし）

論　文　名　異質な他者とのコミュニケーションにおいて生じる情動的困難さに対処するためのアドラー勇気理論―グローバル化社会における英語教育に着目して―

【審査の結果】

審査委員会は吉冨朝子を主査とし、主任指導教員の田島充士准教授、副指導教員の根岸雅史教授、また外部委員の和光大学・高坂康雅教授および立教大学・箕口雅博名誉教授の 5 名で構成された。上記論文の審査ならびに最終試験は 2024 年 2 月 15 日に行われ、審査委員会は全員一致で、申請者に対し博士（学術）の学位を授与するのに相応しいとの結論に達した。

【論文の概要】

本論文は、今日のグローバル化社会において必須となる、異なる価値観や文化的背景を有する異質な他者とのコミュニケーションを示す「越境」（Engeström, 2001）を促進する情動要因の特定を目的としたものである。申請者は心理学における著名な古典の一つである A.アドラーの「勇気理論」に着目し、アドラーの言う勇気が越境を促進する重要な情動要因になることを、大学生を対象とした大規模な質問紙調査によって実証した。さらに大学生を対象に、勇気づけを行うことで異質な他者との越境を促進する介入実験を行い、その効果を検証した。その上で、越境できる学習者を育成するような英語教育実践への応用可能性について論じた。

本研究は全七章から構成される。各章の要点は以下のとおりである。

第一章では、研究の背景目的を提示し、越境を促進する上で情動要因に着目することの意義を述べた。その上で心理学において、越境を促進する肯定的な情動要因として注目されてきたのが、困難を克服するための活力を示す「勇気」であることを示した。

第二章では、越境を促進する要因としての勇気を検討した先行研究が、いずれも個々の研究者の実践知に基づいたものとなっており、勇気の体系的定義づけ

を欠いたものとなっていることを指摘した。

第三章では、勇気概念に関する体系的な検討を行ったアドラーの知見を依拠として、勇気を、自分自身の成長を評価する心性である「優越性の追求」と、他者に対する関心や連帯意識を評価する心性である「共同体感覚」の 2 軸から捉える「ACT モデル」の提案を行った。さらにこの勇気を促進する行動としての対人支援理論である「勇気づけ」に注目し、勇気づけに相当する支援行動としての「ソーシャルサポート」との理論的接続を行った。

第四章では、第一章～三章までの理論研究に関する総括を行い、先行研究の課題を明らかにした上で、これらを踏まえた実証研究の目的を示し、続く実証研究との接続を行った。

第五章では、ACT モデルに基づく勇気尺度の開発および、勇気づけが越境に与える効果について検討を行った。大学生 296 名を対象として新規開発した勇気尺度は、「優越性の追求」と「共同体感覚」による 2 因子によって構成され、信頼性および妥当性も確認された。この質問紙を用いて検討を行ったところ、勇気の構成概念である共同体感覚が越境を促進することが明らかになった。またソーシャルサポートがこの共同体感覚に正の影響を与える勇気づけとして機能した場合には越境を促進するが、共同体感覚を促進しない場合は、越境を抑制することも明らかとなった。

第六章では、質問紙研究で得られた知見をもとに、大学生 12 名を対象に、参加者の越境を促進する実験面接を開発した。説明者役と他者（聞き手）役に分かれ、設定された課題について越境的説明を行わせる実験授業では、実験者が実際に参加者の共同体感覚を喚起する介入を行うことで、越境を促進することが明らかになった。この結果を踏まえ、異質な他者との越境を可能とする英語教育の展開について論じられた。

第七章では、本論文の総括として、国際社会において異質な他者との英語コミュニケーションを可能とする英語教育に対する本論文の貢献点を考察すると共に、これらを踏まえた教育現場における授業案に関する提案を行った。

【講評】

本論文の特に評価出来る点として、以下の指摘がなされた。

①今日のグローバル化社会において重要性を増す、他者との越境を促進する要因として話者の情動性に着目したこと、またアドラーの古典的な理論体系を視点として、その要因を「勇気」概念に整理した上で、大規模質問紙調査によりその効果を実証したことは、社会実践に資する学術的検証を行い得たという点で、学術的意義がある。

②質問紙調査の知見をもとに、参加者らの勇気を促進する介入実験を設定し、実際に越境を促進する効果を実証したことは、教育現場への具体的な提言を行う上での基礎的かつ客観的な根拠を得たという点で、実践的意義がある。
③理論的・実証的研究の成果を踏まえ、越境を志向する英語教育の展開可能性について論じたことは、今日的な学校教育のあり方を問う上で、重要な視点を提供したと言える。

一方で、以下のような課題も指摘された。
① アドラーが共同体感覚でいう「共同体」は、本来、様々な特性を持つ人間を網羅する概念であったにも関わらず、本論文の実証研究では文化的に異質性の高い他者のみを対象としていた点、ACT モデルによる 4 分類が、独立した構成概念ではないことへの留意が不足している点、また実証によって得られた結果について 4 分類に基づいた議論が尽くされていない点は、理論的接合性に問題がある。
② 英語によるコミュニケーションを本論文の考察対象としたにも関わらず、第六章の実験授業で扱ったのが日本語の作文課題を用いた活動を通した越境であった点は、課題遂行の困難さを考慮してもなお、本来の研究目的からずれた検証だった。また、数時間の介入の成果から長期的な効果は検証できていないことや、基礎的英語力が学習者に備わっていることを前提とした議論が展開されていることなど、英語教育現場の実態を必ずしも踏まえていない考察が散見された。
③ 実験授業で扱った課題は、参加者が大学生であったことを考慮すると、そのままの形で小中高校の教育現場や、基礎的な英語力が備わっていない英語学習者への転用可能性は高いとは言えない。

加藤氏は指摘された問題点については十分に自覚しており、これらの指摘に対し誠意ある応答を行った。またこれらの課題は、いずれも今後の研究の発展を期待しての提言であり、本論文が、越境における情動要因の重要性を実証することに成功したという学術的・実践的成果を否定するものではなかった。

【総合評価】
以上の論文評価および最終試験での質疑応答の内容から、本論文は教育心理学に貢献する優れた実証研究であり、学位申請者が研究者としての資質を十分に有していると判断された。よって審査委員会は全員一致で、学位申請者が博士（学術）の学位を授与するにふさわしいとの結論に達した。